

2019年6月16日(日)／説教者：国分美生

説教：「地の底の穴から救う主」

聖書：詩編88：2～13

詩編 88 編は切実に救いを求める祈りの言葉で綴られています。この詩の作者の魂は苦難を味わい尽くしており、ほとんど死人のようになっています。親しい者たちが自分から去っていった状況を嘆きます。作者は今味わっている苦しみは、神の怒りによるものだといっています。神の怒り・罰は病気として現れると考えられていました。この時代、病気は単に病理学的なものではなかったのです。これらのことから、この詩の作者は病に苦しんでおり、精神的にも非常に大きな苦痛を抱えていたことが想像できます。病いは「死」に直結していました。イスラエルにおける「死」とは、「生きている者の世界からの追放」。死のイメージは常に、滅び、深淵、暗闇、静寂といったイメージと結びついていました。イスラエルの人々にとって病気は体の苦痛以上に、神と共同体から切り離され、人間でなくなるという苦痛であったでしょう。しかし、それでもなお作者は神が、深い穴の底から魂を救い出してくださることを信じ、祈り求めるのです。

イエスが起こした数々の奇跡の中でも、病気の癒しは数も多く、印象深いものです。ガリラヤを巡り歩き、エルサレムに向かう途上で、神の福音を宣べ伝えるのと同時に民のなかの病いと患いをすべて直し続けた、と福音書は語ります。このイエスの奇跡は単なる医療行為ではありませんでした。「病気は罪の結果であり、創造秩序の崩壊の象徴である」というユダヤ教の考え方は、罪を悔い改め、神への信頼を深めることを促す、という点ではそれなりの効果があったのかも知れません。ですが、それは一方で病気を持つ人に対する差別や抑圧の原因にもなったことが詩編や福音書を見るとわかります。また障がい者も病人と同じ扱いにあります。イエスは何も持たない裸の赤ん坊としてこの地上に生まれ、弱くされた人、病気のゆえに差別されている人々と寄り添って生きられました。上から目線ではなく、出会った人を一人の大切な人間として見つめ続けました。その姿を通して、私たちの神は困難の中にある人、社会の隅に追いやられている人、病んでいる人をその姿のまま愛して救い出してくださる方であることを知ることができます。(国分美生)